

泉鏡花の信州旅行

——大正二年の旅から生まれた小説——

田 中 励 儀

大正二年十一月、泉鏡花は小村雪岱・堀尾成章とともに、信州旅行に出掛けた。今日、〈鏡花本〉の装幀で名高い雪岱と、出版社千

章館館主の成章、ふたりは翌年九月、美しい鏡花本『日本橋』を刊行する。この信州旅行の期間と同行者が判明したのは、穴倉玉日氏「鏡花、雪岱、千章館」(『論集泉鏡花 第六集』令和3・8・30、和泉書院)が紹介した新出の絵葉書によってである。

景色もいゝんですがね、汽車の中のお嫁さんがホントにさしうつむいた容子がそれはよかつた 鏡

いろくお世話になっております 泰
是から長野迄たのしみに

八日午後四時軽井沢駅にて 成

泉鏡花の信州旅行

大正二年十一月八日長野局消印、東京市本郷区丸山新町一番地、堀尾貞(堀尾成章の妻)宛の寄せ書きである。「鏡」は鏡花、「泰」は雪岱(雪岱を名乗る前の本名・泰助)、「成」は成章。和気藹々とした雰囲気が楽しい。

この葉書から、一行は十一月八日に上野から信越線で長野へ行き一泊したことが窺える。そして後述するように、翌日は篠ノ井線・中央線を通じて上諏訪まで行き一泊。その翌日に中央線で東京の飯田町へ戻ったと推定される。

この二泊三日の旅から、鏡花は短編小説「魔法鱧」(「新小説」大正3・1)「革靴の怪」(「淑女画報」大正3・2)「柏奇譚」(「三田文学」大正5・5〜6)を生み出した。「革靴の怪」は初日の車中を、「魔法鱧」は二日めの車中を、「柏奇譚」はその日の旅宿を、それぞれ中心の舞台とする。

日本の鉄道開業の翌年、明治六年に生まれた鏡花は、各地に路線網が広がっていく（鉄道発達時代）に生き、「風流線」正・続（『国民新聞』明治36・10・24、明治37・10・5）や「銀鼎」正・続（『国本』大正10・7・8）など、数々の（鉄道小説）を発表した。近代科学技術の精華である鉄道に親しみ、それを幻想文学に結びつけるところに鏡花文学のひとつの特徴がある。

二

「革靴の怪」についてはすでに前掲の穴倉玉日氏が考察しているので、簡単に触れるに止めたい。——信越線高崎駅から乗り込み、たまたま「私」の真向かいに座した花嫁姿の娘が、席に置かれた革靴の大口に衣装の袖を挟まれる。付き添いの縁者が解錠を求め、持ち主の男は、鍵は捨てた、令嬢の袍の奥に魂を納めたのだから決して革靴は開けない、と拒絶する。娘は片袖を裂き、男に残して下車する。——寄せ書き葉書に鏡花が記した「汽車の中のお嫁さんがホントにさしうつつむいた容子がそれはよかつた」という偶然の出会いが「革靴の怪」発想の基盤となった。革靴には亡くなった妻と子供の白骨まで収めてあり、それを開くこともなく山奥の郵便局で生涯を終えると吐露する小官吏の覚悟は鏡花の独創であり、その奇想には驚かされるが、見知らぬ他人同士が思わぬ接点を持つ鉄道の装

置が、新奇な小説を創造する機能を果たした好例といえるだろう。同じ葉書に堀尾成章が「八日午後四時 軽井沢駅にて」と執筆時を記録しているので、当時の時刻表（『汽車汽船旅行案内』大正1・9、旅行案内社）を照合すると、鏡花たちが利用した列車が、上野発午前十時十分、軽井沢発午後四時五分、長野着午後六時五十分の直江津行一一一列車であることが特定できる。

「革靴の怪」では、「赤表紙の旅行案内」（三）つまり『汽車汽船旅行案内』と表紙に大書された時刻表を革靴から取り出して凝視していた男が、窓から鍵を投げ捨てる。瞬時にして花嫁姿の娘に魅了された男は鉄縁の時計を見て、「零時四十三分です。此の汽車は八分に着く」（八）、次の駅で巡査に渡されてもかまわないと覚悟を示す。時刻表によると、一一一列車が高崎駅を出るのは午後一時四十二分、次の飯塚駅に着くのは午後一時四十八分。つまり、鏡花は一時間早く誤記していることになる。当時の時刻表の文字は小さく、近視眼の鏡花が読み間違えてもやむをえなかつただろう。いずれにしても、この小説を書く時、机辺に時刻表を備えていたことは間違いない。

また、汽車の進行を表現するに際し、歌舞伎や浮世絵にとりあげられた伝承が活かされていることも鏡花らしい特徴である。たとえば作品末尾、片袖を車内に残したまま下車した娘がブラットフォール

ムから汽車を見送る場面。

黄金を溶す炎の如き妙義山の錦葉に対して、ハツと燃え立つ緋の片袖。二の腕に颯と翻へつて、雪なす小手を翳しながら、黒煙の下に成り行く汽車を遙に見送つた。

百合若の矢のあとも、其のかゞみよ、と見返る窓に、私は急に胸迫つて、何故か思はず落涙した。

進む汽車の窓からプラツトフォームの娘を見返つた「私」が唱える「百合若の矢のあと」は、男が遠山の頂を望んで投げた鍵の軌跡が、汽車の進行と輻輳して語られたものだろう。周知のように百合若大臣伝説は、蒙古襲来に対する討伐軍の大將百合若が、神託を受けた鉄弓を振るい遠征先で勝利する話である。幸若舞や浄瑠璃の題材となるとともに、歌川国芳画『木曾街道六十九次』の十「深谷宿」(嘉永5) ほかでその強弓が描かれる。

一方、作品冒頭部には、上野を出て麻を過ぎる頃から向こう側の座席に置かれた革鞆が気になり始めた「私」が、十八九年前に遭遇した見世物小屋に掲げられた絵看板を思い出す場面がある。

続き、上下に凡そ三四十枚、極彩色の絵看板。(中略) 芝居がかりの五十三次。

岡崎の化猫が、白髪の子に血を滴らして、破簾よりも顔の青い、女を宙に蹴へた絵の、無慙さが眼を射る。(一)

これもまた周知の話だが、岡崎の化猫は鍋島・有馬と並ぶ(日本三大化猫伝説)のひとつである。四世鶴屋南北の歌舞伎「独道中五十三次」(文政10)で名高い。ある女の怨念が死んだ母親に憑依し、十二単衣を着た化猫となつて多くの人に害をなす話であり、歌川国芳画『東海道五十三次』「岡部」(天保14頃)ほか、数多くの浮世絵が描かれた。(道中もの)の浮世絵が、鏡花の(旅行小説)を背後から支えているとみることもできようか。

「革鞆の怪」では、並んだ見世物小屋に入った「私」が、筵の上で唯一個置かれた陰気な光沢を持った鼠色の古革鞆を見て、悪い夢に魘された思い出につながり、妖しい雰囲気を伴つて眼前の革鞆を焦点化していく。「さあ、看板に無い処は木曾もあるよ。木曾街道もあるよ。」(二)という客寄せの口上の出典は未詳だが、ここにも(道中もの)との関連が見出せる。

見世物小屋の思い出に引かれた「私」は、眼前の革鞆の中に、不気味な、謎のようなものが入っているのではないかと想像する。

少くとも、あの、絵看板を畳込んで持つて居て、汽車が隧道へ入つた、真暗な煙の裡で、颯と化猫が女を噛む血だらけな緋の袴の、真赤な色を投出しさうに考へられた。(二)

鉄道の隧道が化猫伝説と結びつき、妖しい雰囲気醸し出す。

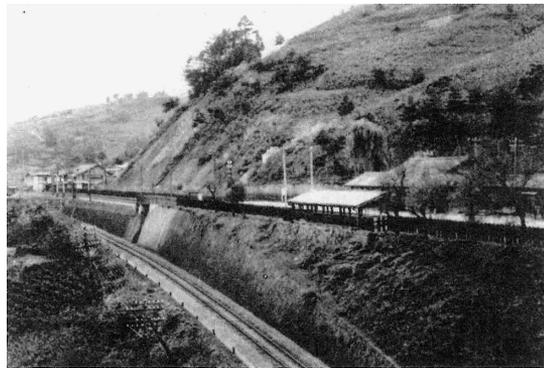
三

鏡花が長野から篠ノ井線・中央線を経由し上諏訪まで赴いた二日めの行程が反映された「魔法罫」には、(日本三大車窓)のひとつ「姨捨駅」と、当時日本第二位の長さを誇った「冠着隧道」が描かれる。隧道内での不思議な光景が印象に残る短編である。

篠ノ井駅からふたつめの「姨捨駅」は、当時の『鉄道旅行案内』(大正6・6・15、鉄道院)に、「駅前眺望甚佳、屋代を中にして、左右に幾村の人家散在し、千曲川より川中島のあたり長野まで善光寺平一面の地眼下に見渡される」と、その眺望が謳われ、「山は古より名高き日本第一の観月の勝区で、駅下に長楽寺がある。庫裡の一室を月見堂と云ひ、欄を設けて月見に便してある」と、観月の名所であることが紹介されている。

この地を訪ねた鏡花は、「窓々は恰も名にし負ふ田毎の月のやうな汽車」(一)と、居並ぶ客車の窓を、棚田一枚ごとに月が映るとされる「田毎の月」になぞらえ、「海拔二千尺の峰に於けるプラットフォームは、恰も雲の上に拵へた白き瑪瑙の棧敷であるが如く思はれた」(二)と、美しく表現する。五分間停車と聞いてプラットフォームに降り立った作中の旅客は、「実にい、景色の処ですな。」「月見堂と云ひますのは。」(二)などと、駅員や駅夫と言葉を

四



〔写真Ⅰ〕昭和初年の姨捨駅
(矢羽勝幸『姨捨山の文学』昭和63・11・20、信濃毎日新聞社)

交わす。事前に『鉄道旅行案内』から予備知識を得ていて、月見堂の所在を尋ねたのだろうか。

「姨捨駅」は明治三十三年十一月開業(ステーション倶楽部編『駅—JR全線全駅 上』昭和63・9・10、文芸春秋)。スイッチバック構造で有名な駅「写真Ⅰ」で、蒸気機関車の給水施設があった。そのため、停車時間が長かったものと推測される。今回、鏡花は途中下車しなかったが、五分間のプラットフォームからの景色に

心衝たれたのだろう、大正六年の秋（推定）、雪岱とふたりで篠ノ井線に乗って再訪し、夕刻に姨捨駅で下車して月を眺めた。この旅が「革靴の怪」の続編ともいえる「唄立山心中一曲」（「改造」大正9・12）を産むこととなる。

雪岱が実名で登場する「唄立山心中一曲」では、「木賊刈ると云ふ歌のま、研かれ出づる秋の夜の月と成るであらうと、其の気で篠ノ井で汽車を乗替へた。が、日の短い頃であるから、五時そこ／＼と言ふのに最うとつぷりと日が暮れて」（一）と、戸惑う様子が記されている。当時の時刻表（『公認汽車汽船旅行案内』大正4・3、旅行案内社）を閲すると、篠ノ井発午後四時二十三分、姨捨発午後五時六分の一列車を使ったことが確認できる。

ただし、「木賊刈る」の歌は、「そのはら山の木の間よりみかさいてぬる秋のよの月」とつづく、『夫木和歌抄』巻二十（明治39・11・25、国書刊行会）収録の源仲正の作で、長野県西端阿智村園原を舞台としたものである。姨捨で詠まれた歌では無く、鏡花は「そのはら山」を省略している。同じ作中で、こちらは全体が引かれる「わが心なぐさめかねつ更科や姥捨山に照る月をみて」（一）は、たとえば、一枚刷『信州更級郡姨捨山十三景之図』（無刊記）でも筆頭に掲げられる、『古今和歌集』巻十七雑歌（上）よみ人しらずの、姥捨山を代表する歌である。

「唄立山心中一曲」は、「小村さん」と「私」が薄暗い鰹鮓屋の二階で、銀流しの藤次という旅回りの鑄掛屋から、飛驒の山奥、仮設天幕の電信局で起こった四角関係の悲劇を聞く。花嫁の片袖、妻子の遺骨を入れた革靴、持主の電信技師等々、「革靴の怪」を引き継ぐ後日譚で、随筆形式の枠組みが奇譚の「実在」を保証する。随筆調の部分では、「十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事」（一）ゆえ、名月には遅れたものの、「宵の明星が晃然と蒼い」（二）。鰹鮓屋の女房が「あの山裾が、左の方へ入江のやうに拡がつて、ほんのり奥に灯が見えるでございませう。善光寺平でございましてね。」（二）と案内する絶景は、篠ノ井線「姨捨駅」が（日本三大車窓）のひとつに数えられる根拠となっている。根室線「狩勝峠」・肥薩線「矢岳越」とを併せ、（日本三大車窓）は明治後期には選定されていたらしい。

「唄立山心中一曲」の夜景に対し、「魔法鱈」では「空も山も、余りの色彩に、我は果して何処にありや」（二）と嘆息する彩り豊かな秋景が描かれている。やがて、発車。「山々谷々の錦葉の錦は、照々と輝を帯びて颯と目の前に又巻絹を解揚げた」（四）。車窓からの鮮やかな眺めに心動かされ、村の火の見障子を見ては「山姫が撞木を当てて、もみぢの紅を里に響かす」（四）空想にふけった旅客だが、突然、汽車が隧道に入って視界が遮られた。

鏡花の体験を反映した旅客「彼」は、隧道の予想外の長さに驚くとともに、窓の隙間から流れ込む激しい煤煙に噓せ込む。「毒を以て毒を制すと遣れ」(五) とばかり、巻蓆を吸って石炭臭いのを浚って出そうとするが、ふと気がつく、斜め向こうの座席に小造りに過ぎるほど背丈恰好の小さな女ふたりがいた。「彼」は、隧道工事の荒くれ工夫に凌辱された「弱き棲主たちの幻」(六) ではないかと疑い、今、「ぐらく」と地震ふる墓の中に、一所に住んで居るもの、やうな思ひ」に囚われる。汽車の煙は「畳まり積る霧」、揺れる客車は「墓穴」と看じた。

死を覚悟して危険極まりない隧道に入る技師と女を描いた「山中哲学」(「太陽」明治30・12) にみられるように、早くから鏡花には隧道を不吉な構造物と捉える傾向があった。「山中哲学」は越前春日野峠に掘られた道路の隧道だったが、「魔法罫」は鉄道の隧道であり、疾走感もたらされる。鏡花は、この隧道に入る時の様子を「汽車は天窓から、鈍き錘と変じて、山の底に潜込むが如き、易からぬものの氣勢に、少からず驚かされたのである。」(四) と記し、車内の轟音を「唯瀧に捲かれた如くに響く」と、やや大袈裟に表している。

このトンネルは、当時の『鉄道旅行案内』(大正6・6・15、鉄道院)の「院線に於ける著大なる隧道」で採り上げられている

「冠着隧道」のことである。篠ノ井線、姨捨―麻績(現・聖高原)間、八七一四呎(二二五六米)の長いトンネルで、冠着山の下を貫いている。小林寛則・山崎宏之『鉄道とトンネル―日本をつらぬく技術発展の系譜』(平成30・4・20、ミネルヴァ書房)が記すように、明治三十三年十一月に開通。明治三十六年二月に中央線「笹子隧道」が開通するまで、本邦第一の長さを誇っていた。姨捨側からは二十五パーミルの急勾配を登るので、蒸気機関車は激しい煙を出すことになる。その対策として、列車が隧道に入り切ると入口に垂れ幕を下ろして風が吹き抜けるのを防ぐ隧道幕が設置されていた。鏡花が車内にも流れ込む煤煙を作品に取り込んだのも、事実上即している。

「冥界の伴侶か、墓の相借家か」(一六)とまで看じたふたりの女は、汽車がトンネルを出ると別條なく普通の大きさになっていた。「矢張り隧道に悩んだんだ」。近代土木工事技術の成果である鉄道トンネルを幻想空間出現の場とするところに、鏡花文学の特徴がある。この後、列車が塩尻に近づくと、それまで座席に横倒れに寝ていた鳥撃ちの帰りらしい大漢子が立ち上がり、ふたりの女の頭上をむすくと掴んで引つ立てる。「呆気に取られた彼を一人室内に残して、悠然と扉を出たのである。／あとの、もの凄さ」(七)。幻想の余韻が漂う前半の幕切れである。

トンネルに対する鏡花の関心は深く、「冠着隧道」に入った時、「此の隧道は以ての外鎖（ヤードポンド法の長さの単位―引用者注）がある」（四）と感じ、「普通我国第一と称へて、（代天工）と銘打つたと聞く、甲州笹子の隧道より、寧ろ此の方が長いかも知れぬ」と、「笹子隧道」を想起する。東京に戻る際に必ず通らねばならないトンネルであり、それを避けるため「二層中仙道を中央線で、名古屋へ大廻りをしようかと思つたくらゐ」（五）とまで考える大仰さが読者の苦笑を誘う。「笹子隧道」は、前出の「院線に於ける著大なる隧道」に、中央本線、初鹿野―笹子間、一五二七五フィート（四六五六米）と記されるトンネルで、昭和六年九月に上越線「清水トンネル」（九七〇二米）が開通するまで、日本一の長さを維持していた。鏡花が信州を旅した大正二年の時点では、「笹子隧道」が第一位、「冠着隧道」が第二位の長さを誇っていたのである。

トンネルの笹子側には伊藤博文が揮毫した「因地利（地の利に因つて）」という扁額が、初鹿野側には山縣有朋が揮毫した「代天工（天に代わつて工事を行なう）」という扁額が掲げられている（前出「鉄道とトンネル―日本をつらぬく技術発展の系譜」扁額のいろいろ）。鏡花は、トンネルの完成を祝して時の権力者が揮毫した扁額の鉄道知識まで持ち合わせていたのである。

日本三天車窓のひとつ「姨捨駅」から、延長距離本邦第二位「冠着隧道」へ。明るく開かれた光景から、暗く閉じられた空間へ。急激に変化する展開は、徒歩で旅する時代にはありえなかった、鉄道旅行ならではの疾走感であろう。鏡花はその特性を独自の幻想文学に活かしたのである。

四

「魔法礮」後半は、上諏訪の旅宿菊屋が舞台となる。塩尻で大漢子とふたりの女を降ろした汽車は、中央線を東に向かい、下諏訪から乗り込んだ商人風の男がその空席に座った。別に異変は起こらず、旅客「彼」は上諏訪駅で下車する。「改札口を冷く出ると、四辺は山の陰に、澄渡つた湖を包んで、月に照返さるゝ、為か、漆の如く艶やかに、黒く、且つ玲瓏として透通る」（八）。折悪しく、目の前から人力車が三台駆け出して、「彼」は宿へ徒歩での移動を余儀なくされる。「―俚が三台、人が三人―」、大漢子の一行は塩尻で下車せず、車室を変えて上諏訪まで来たのだろうか。ここで、上諏訪駅を写した古絵葉書（無刊記）を掲げたい「写真Ⅱ」。間近に諏訪湖を控えて大きな駅舎が建つ。駅前広場には客待ちの人力車が二台。鏡花が描いた実景に近い。

当初から諏訪に一泊と予定していた「彼」は、「其の宿の名は、



〔写真Ⅱ〕上諏訪停車場（無刊記、上諏訪町博信堂）

八重垣姫と、随筆の名で、余所ながら、未見の知己。初対面の従姉妹と、伯父さんぐらゐに思つて居たと、親愛の情を表す。八重垣姫は、歌舞伎『本朝廿四孝』（明和3）に登場する長尾謙信の娘。武田信玄の子息勝頼と恋仲だが、両家は信濃の領地を争っているために結ばれない。謙信が預かったまま返そうとしない信

玄秘蔵の（諏訪法性の兜）をめぐつて話は展開する。兜を掲げて見得を切る八重垣姫の姿が見所で、湖畔に像が建つほどの諏訪湖を代表する人物である。父謙信が討手を差し向けた危機を勝頼に伝えるべく、兜に祈り靈狐の加護を得た八重垣姫は、湖の空を狐火とともに渡っていく。〈諏訪七不思議〉の第一「御神渡り」の伝承を取り合わせたとされる（石橋健一郎「八重垣姫」、古井戸秀夫編『歌舞伎登場人物事典（普及版）』平成22・7・10、白水社）。

「彼」が親しんだという「随筆の名」は特定できないが、たとえば、百井塘雨『爰埃随筆』（寛政6以前）巻之六「諏訪湖」には、「尺余の氷の真中に一文字に裂破る。その幅三尺計り、向ひ路より爰方に貫けり。」と「御渡り」の様子が記され、「諏訪の湖や氷の上の通ひ路は神のわたりて解るなりけり」と、「堀川百首」の歌が引かれてある（『日本随筆大成 第二期卷六』昭和3・11・1、日本随筆大成刊行会）。活字本の刊行は昭和期を待たねばならないが、「写本として諸所に伝えられ」（丸山季夫「解題」『日本随筆大成 第二期12』昭和49・6・10、吉川弘文館）、柳田国男『山の人生』（大正15・11・15、郷土研究社）にも書名が記されていることから、鏡花も写本に親しんでいた可能性もある。

いずれにしても、歌舞伎や伝承に深い関心を抱く鏡花が、上諏訪温泉探訪を楽しみにしていたことは確かである。大正期に刊行された、温泉研究会編『全国温泉案内』（大正13・4・12、日本書院）「上諏訪温泉」の項は、「気候は土地が高燥であるから、空気などは常に清新で、四季を通じて気温や気流の激変がないので療浴には四時共に好適である」と賞賛しつつ、「湖水が見渡される様な設備がしてある旅館がないこと」を惜しんでいる。牡丹屋、諏訪ホテル、布半、甘精軒と、旅館名が挙げられるが、「菊屋」は見出せない。あるいは牡丹屋の牡丹を菊に変えた命名かもしれない。時代は下が

るが、昭和六年発行の『鉄道沿線 ポケット旅館案内』（昭和6・1・10、旅行研究社）に、牡丹屋は「上諏訪本町 駅より五丁 上客向」と記されている。「官公吏学生向」「商人向」など他の旅館に比べ、高級だったことがわかる。ちなみに、大正・昭和期に鏡花が利用した宿には高級旅館が多い。今回は経済的に豊かな堀尾成章の後援もあつたのだろうか。上諏訪本町の牡丹屋は、作中の「町通りの其の菊屋」（八）と所在地も一致する。湖の眺望は得られなかったようだ。

十一月の諏訪は寒い。新しい浴衣に着換えて湯殿へ急ぐ「彼」は、途中、広間で玩弄具おもちゃの鳥を操るひとりの女を見る。きりく、きりく。きいこ、きつこ、きいこ……。停車場ちやうばから俣で走らせた三人の客の姿は見えず、「彼」は女に手招かれる。この先の展開が期待されるとは思えないが、「——此に就いて、別に物語があるのである。」（十）と、話は中断される。未完の小説であり、篠ノ井線車中の前半と、上諏訪温泉旅館の後半とのつながりも判然としない。大漢子が荷物棚から片手掴みに引き下ろす「革紐の魔法罫」（七）が題名に選ばれていることから、前半の隧道での不思議に力点が置かれていると考えてよいだろう。

ところで、「魔法罫」に描かれた汽車の進行には疑問が残る。前出の『汽車汽船旅行案内』（大正1・9、旅行案内社）と照合する

と、「長野で弁当を買った」（三）との記述から、「彼」が乗車したのは、長野発午後零時十五分、姨捨発午後一時十八分、塩尻着午後三時四十三分の七〇四列車だったことが確認できる。にもかかわらず、真昼であるはずの姨捨付近の車窓が「峰は木の葉の虹である、谷は錦の淵たにである。……信濃の秋の山深く、霜に冴えた夕月の色を、まあ、何と言はう。」（二）と夕方の景色として描かれていることが第一の矛盾。また、「塩尻、塩尻——中央線は乗換のりかへ」（七）とのアウンスがあつたにもかかわらず、「彼」が乗った汽車はそのまま上諏訪に向かったことが第二の矛盾。東京と名古屋を結ぶ中央線は、塩尻を境にして、東京方面を中央東線、名古屋方面を中央西線と通称される。七〇四列車は中央西線に当たる名古屋行であり、実際の鏡花はいったん塩尻で下車、およそ一時間の待ち合わせの後、塩尻発午後四時四十四分の中央東線四一八列車に乗り換え、上諏訪に午後六時十二分に着いたと考えられる。菊屋の紋が付いた提灯を掲げた函車はこぐるま（荷物運搬俣—引用者注）が「一散に黒く成つてがら」と月夜を駈出す。……」（八）夜景は実際に即している。これは細部に拘って読めば気づく矛盾に過ぎず、もちろん、作品の魅力に関わる問題ではない。夕刻から夜へ、時間展開をなめらかにして読者を導く配慮が施されていると捉えたい。

五

「魔法鱈」後半、「彼」が菊屋で出会った玩弄具の鳥を操る女の、〈別の物語〉が著されることはなかった。それに代わるのが、同じ旅宿を舞台とする「柏奇譚」である。——主人公は松沢孫一。少々正面の好い男等々力と、年少な新郷と、三人で信濃の旅に出た。深夜、上諏訪の旅宿を忍び出て、城裏の遊廓に遊んだ翌朝、等々力が金時計を紛失したことに気づく。樓の女将や番頭が冷たくあしらう中、等々力の相方を務めた遊女「柏」が親切に対応してくれたおかげで、無事、みつかった。樓の女将に逆らった柏の身を心配した等々力は、松沢にその後の様子を窺うように依頼する。——

「革靴の怪」「魔法鱈」では「私」や「彼」のひとり旅とされていたが、この「柏奇譚」では実際に即した三人旅が描かれている。松沢は鏡花、等々力は成章、新郷は雪俗をモデルとする。ただ、旅程は実際とは逆方向で進んでいる。東京から甲府を通過して上諏訪までやってきた往路の三人づれだが、その先は別行動が予定されていた。本郷は塩尻で乗り換えて名古屋から伊勢路へ、等々力は長野で別れて越路へ、松沢は碓氷を通過して東京へ引き返すつもりだった。等々力に頼まれた松沢は予定を変え、後戻りしてふたたび同じ旅宿に泊まったのである。

「昔の本陣とか言ふ、づつしり重い建もの」(一)の客室から長廊下を浴室へ降りる道筋は「魔法鱈」と同じで、たどり着いた浴場で松沢は、「叱、叱、ふッ、ふッ。」と掛け声をしながら手ぬぐいで掬った湯を流場の石畳にぬね上げる奇怪な老爺に出会う。——甲府の資産家の老婆が、ある時、視界に現れた緋の袴の姫に松扇で煽がれ、飛び散ってくる細かな泡が変じた百をこえる小さな生首につきままとわれる。この幻覚は、やがて連れ合いの老爺にも伝染り、湯治先の上諏訪で生首を追い払おうとして湯をぬね上げていたのである。後程、壁の破れ目から隣室を覗いた松沢の眼に、緋の袴を着けて横たわる女に件の老爺老婆が絡みつく様子が映った。緋の袴の女は、看病という約束で身請けされた柏であり、姫の姿に装われていたのである。以前に雇われた看護婦が辛い目に遭っていたと知った柏は、老夫婦の手から逃げて知己の茶屋に潜んだ。翌日、諏訪明神に詣でた帰途、偶然、茶屋の小座敷で柏を見かけた松沢は、「確りおし、私たちが。」と、後ろ盾になることを約束する。——

細かな泡が変じた数知れない生首の奇想は無類であり、その増殖が何とも言えない粘着感を呼び起こす。別の形でだが、粘着感や冒頭の松沢の頭にも現れる。旅宿で床に入った松沢は、ひとりでの口を衝いて出て来る「諏訪の旅籠屋、三輪の茶屋……諏訪の旅籠屋、三輪の……」(一)という歌に悩まされ、「奈良と諏訪では、考へて

見た処ところで、第一、洒落せだろ処か、語呂も合はず、地口の真似事にも成らないのに、まんじりとして目が冴えて寝られはしない。この音曲は、近松淨瑠璃『冥途の飛脚』（正徳1以前）に用いられた、清元『梅川』（文政7）の道行「借り駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日、夜を明かし」の〈替え歌〉である。「紫障子」（新小説 大正8・3〜4）の奈良の宿で「此が、名代の奈良の旅籠屋やて。」「三輪の茶屋と一所に、唄にありますやる」（七）というやりとりが記されているように、鏡花の愛唱歌だった。いったん取り憑かれると頭から離れないフレーズは、多くの読者も経験したことがあるだろう。そんな共感を呼ぶ書き出しである。

次いで松沢は、風邪ひきから耳を痛めた去年の暮れ、ふいと口を衝ついて出た唄「ちちく、たつちく、太衛門どんの——」（二）を思い出す。「ちちく、たつちく、太衛門どんの——」（二）を思いに追はれて、泣く声聞けば、痛いとも言はず、痒かゆいとも言はず、唯ただ泣くばかり。（八）とつづく歌詞が、今、上諏訪の宿でも耳を離れなくなつたのである。このわらべ唄は、鏡花が序文を寄せた童謡研究会編『諸国童謡大全』（明治42・9・15、春陽堂）「東京 遊戯唄」に、「いつちくたつちく太衛門どんの乙姫様が、湯屋でお圧されて鳴く声聞けば、チン〜マゴ〜オシヤリコシヤリコ。」の歌詞で収められている。「宝暦明和年間江戸に於て行はれし童謡を集めた」

（『近世文芸叢書第十一 俚謡』「緒言」明治45・1・30、国書刊行会）行智編『童謡集』にも「いつちくたつちくたんゑむどんのおと姫おとぎが、ゆゆ引屋でおされてなく声は引、ちん〜もんがら〜、おひやりこひやりこ、」が見出されるように、「古い鬼さめ歌」（尾原昭夫編『日本のわらべ歌全集7 東京のわらべ歌』昭和54・10・28、柳原書店）だった。須田千里氏「解説」（『新編泉鏡花集第八巻 信州飛驒』平成16・1・7、岩波書店）でも詳述されている。松沢の頭に浮かんだ歌詞には出てこないが、「湯屋でお圧されて」の一節が〈温泉〉に通じると言えなくもない。

白衣緋の袴姿の柏が「乙媛様」、奇怪な老爺が「ちんがらほん」に比定されるように、わらべ唄は作品の展開につながる。振り返れば、「魔法鱧」後半の女は、「池に面した大広間、中は四五十畳と思はる、」（十）座敷で、「きり〜、きり〜。／＼きいこ、きつこ、きいこ」と、玩弄具の鳥を遊ばせていた。「柏奇譚」の柏もまた、「十五六畳、二十畳、じと〜霞んだ、湿つぽい、そしてだ〜つ広い大おほな室」（六）に引き入れられており、それを見た松沢の頭に去来する「ちちく、たつちく」もオノマトペの効用が共通する。「——此に就いて、別に物語があるのである。」として中絶した「魔法鱧」から二年半近く。鏡花は細かな生首増殖の構想を得て、「柏奇譚」と題した新たな幻想文学を立ち上げたのだった。その虚構の

リアリティ、真実性を、松沢の頭に固着したふたつの歌が支えている。

同じ旅宿を舞台とした二作品。大広間やオノマトベが「魔法鱧」後半と共通する「柏奇譚」には、「だ、だ、つ広い、大な室」を透き見した松沢が「陣屋へ忍んで、諏訪法相と、云ふのに手を掛けると齋しい」(六)と自嘲する場面がある。これは、花作りに身をやつして謙信の館に入り込んで、〈諏訪法性の兜〉を取り戻そうとする武田勝頼になぞらえた表現であり、鏡花が「本朝廿四孝」の舞台としての諏訪を常に意識していたことが窺われる。

いくつかの共通点が見出せる二作品だが、遊女が主人公として登場するのは「柏奇譚」に限られる。客を見下すような女将や番頭の振舞いをきっぱり捌き、松沢に「一品が有つたね」(十)と感心させる女性の名は「柏」。その源氏名は「宮廷奉仕の官人が身につけた下着の名称で元は〈間籠〉の意といふ」(須永朝彦「解題」『鏡花コレクシヨンⅢ』平成5・1・23、国書刊行会)。官女を表徴する優雅な命名といえよう。寛永の三名妓のひとり高尾太夫まで引き合いに出される「柏」のような遊女に、鏡花らは会う機会があったのかはわからない。「われらの手段は旅行にして、其の目的は美人なり」と嘯いて、等々力・松沢・本郷の三人は「城裏の遊廓の某楼」(八)に足を運ぶ。

ここで、大正期に刊行された花街案内の写真集、黒沢万喜編

『諏訪の華』(大正14・8・20、上諏訪本町飯島書店)を紹介したい。「其土地の人情風俗を探らんとする人は、必ずや花街の女を見んと欲し、或は紅燈の下に三味線の女を求めて、其の情緒を味はんと致します。」「(発行の言葉)」と謳われる小冊子に、四十二頁に亘って駒勇・吉丸・君葉ら八十四名の芸娼妓の肖像が収められている。残念ながら柏に類する名は見出せないが、巻末には料理店や商店の広告とともに、「料芸二業組合芸妓置家」の一覧が掲載され、高島家・華月・蔦牡丹をはじめ、三十二軒の置家名が記されている。賑やかな花街が繁盛していた様子が窺える。

「等々力は帽子の上へ貸手拭の頬被。城跡の公園の石垣を右に、大手あとの小橋を渡つて、(中略) ばけものが三個通つた」(八)。人目を憚りながら遊廓へ向かう三人連れの描かれ方から、成章に先導されて鏡花と雪岱が後につづく足取りが彷彿とする。旅先での見聞が遊女を主人公とする作品の基盤となつた可能性は大きい。

「革靴の怪」「魔法鱧」「柏奇譚」、大正二年の信州旅行が生み出した泉鏡花の〈鉄道旅行小説〉は、汽車・駅・トンネル・温泉・旅館・遊廓といった旅での経験に発し、土地を彩る風景や伝承を取り入れた紀行文形式の外枠を持つ。一方、革靴に挟まれた娘の片袖、背丈格好の小さなふたりの女、細かな泡が変じた大量の生首といっ

た小説の核心は、おそらく鏡花独自の発想だろう。それらは、旅行革靴、トンネル、温泉といった、旅行用具、鉄道施設、宿泊旅館につながっている。さらに、土地に関わる形で和歌・歌舞伎・清元・浮世絵・わらべ唄等々が作品を背後から支えている事実を考えると、鏡花の幻想小説における鉄道旅行の大切さが、より強く浮かびあがってくる。

〔付記〕 本稿は、二〇二一年一月二七日にオンラインで開催された日本近代文学会例会「特集…鉄道と文学の一五〇年」での発表「近代ツーリズムと作家の旅」の前半部を増補改訂したものである。本稿で引用した泉鏡花の文章は、岩波書店版『鏡花全集』全二十八巻・別巻一（昭和61・9・3〜平成1・1・10）を底本とする。引用に際しては、ルビを簡略化し、漢字は原則として新字体に改めた。／は改行を表す。